



まわりの人を思いやる心から 平和な世界が実現すると信じて

木戸 悠加さん 金沢市立西南部小学校教諭
Haruka Kido

エチオピアで健気に生きる靴磨きの少年に衝撃を受け、青年海外協力隊に参加。

赴任したエルサルバドルでは、長い内戦や貧困に苦しんできた人々が、互いに助け合う姿に感動した。

日本の未来を担う子どもたちに世界の現状を知ってほしいと、日本の教育現場で国際理解や平和教育に力を入れている。

靴磨きの少年に 心揺さぶられて

石川県で小学校教諭をしていた木戸さんは、2012年にJICA北陸が主催する教師海外研修に参加、エチオピアを訪問し10日間にわたり教育事情を視察した。その時、道端で靴を磨いている大勢の子どもたちの姿を目にした。

「その中に小学校5年生くらいの男の子がいて、首に大きな腫瘍をかかえながら必死に私の靴を磨いてくれたんです。この子はあとのくらい生きられるのだろうか、ただ靴を磨いてその日暮らしをして、まだ人生の楽しさも知らないのに……そう思うと、涙が止まりませんでした」それは、何もできない自分の

不甲斐なさに対する涙でもあった。何か自分にできることはないかと考え、青年海外協力隊（以下、協力隊）に応募した。「一生で一番の勇気」を振り絞っての決断だった。

エルサルバドルにて 算数の理解力向上に奮闘

2015年7月、木戸さんは協力隊としてエルサルバドルへ派遣された。中米の太平洋岸に位置するこの国では、1979年から10年以上も内戦が続き、92年に和平合意が成立したが、今も貧富の差や治安の悪さなど多くの課題をかかえている。

木戸さんは配属先のサンシドロ小中学校で、主に算数教育を担当した。「100

マス計算」を採り入れて繰り返し練習させるなど、子どもたちの計算力向上に力を注いだ。

「算数が苦手だった男の子が学年で一番の点数を取って、表彰状を見せびらかしながら帰っていく姿が、とても印象的でした。ひたむきに頑張る大切さを教えてきたけれど、それが形になった気がして嬉しかったんです」





日本の固定観念で物事を考えるのをやめ、時間やスタイルにとらわれずに、どれだけ分かり易い授業ができるか、必死に取り組んだ。

同僚の教師たちと、お互いの授業を見て学び合う研究授業も行った。先生たちが新たな授業のスタイルを採り入れたり、工夫を重ねたりするようになり、大きな手応えを感じることができた。

「エルサルバドルの人たちは、困っている人がいれば必ず手を差しのべ、誰かが失敗しても決して怒りません。皆で助け合う姿に何度も感動しました。途上国の子は日本と全然違う生活をしていてかわいそう、そんな風に日本の子どもたちに感じてほしくない。このことはきちんと伝えたいと思っています」

インターネットを利用して 現地と日本の子どもたちが対話

現職教員として協力隊に参加した木戸さんは、エルサルバドルにいる頃から、現地の小学校と日本の小学校を繋ぐような活動をしたい、と考えていた。帰国後に赴任した小学校で、担任する6年生のクラスの子どもたちに、エルサルバドルの村の小学校生活を伝える授業を実施。インターネットを利用し、二つの国の子どもたちが、13時間の時差を超えてリア



困ったもの同士が助け合い、言葉や行動で愛情を伝え合う。生活は貧しくとも心は豊かでいられることを、エルサルバドルは教えてくれた。

ルタイムに対話したのだ。

日本の子どもたちは、縄跳びやお手玉など得意な遊びを次々に披露。エルサルバドルの子どもたちは、町の風景や住んでいる所を紹介したり歌を聞かせたり。「遠い国でも同じように生きているんだな」「エルサルバドルの子どもたちの元気な姿がとても印象的」などの感想があり、お互い心に残る体験になった。

「社会科で国際協力について学ぶ際も、エルサルバドルの国や人々の暮らしなどを話しています。実体験に基づいた話に子どもたちも興味津々。将来は実際に自分の目で見たみたい、ボランティアをしてみたい、と卒業文集に書いてくれた子もいるんですよ」

全校児童を集めた全体集会でも「平和教育」を行った。協力隊としての活動を紹介し、内戦によるダメージや今も残る貧富の差などに苦しんでいる人々の現状を伝えた。

「今、自分たちは何ができるかを子どもたちに考えてほしい。まずは、近くにいる人に優しくすること。それが、クラスへ、学校へ、そして地域から日本中へと広がり、世界の平和に繋がるのではないかと願っています」



「近くにいる人に優しくすること」そんな小さなことの積み重ねが社会を変え、世界の平和に繋がっていく、と子どもたちに伝えている。

木戸 悠加さん プロフィール

石川県出身。大学でスポーツ科学を学び、保健体育教員免許を取得。石川県で小学校教諭をしていた2012年、教師海外研修に参加し、エチオピアを訪問する。現職教員特別参加制度で青年海外協力隊に参加、2015年7月からエルサルバドルへ。帰国後は小学校教諭に復職し、現在は金沢市立西南部小学校で教鞭を執る。

と願っています」

国際理解教育とは、世界の現状を知り、世界の誰かの生き方に触れることで、身のまわりの人をなお一層大切にすることだ、と木戸さんは考える。

子どもたちを未来に向けて導くことが教師の重要な役割だ。その重責を担ううえで、異なる環境にいる子どもたちと触れ合った協力隊の2年間は、木戸さんにとってかけがえのない財産になった。

「一生で一番の勇気を振り絞り協力隊に参加して、本当によかった。これからは、その経験を多くの人たちに伝えていきたい。そして、子どもたち一人一人に、心から大事に思っているよ、と言葉や行動で愛情を伝え、その成長を見守っていきたいと思っています」

木戸さんへの エール!

金沢市立西南部小学校
校長

吉田 弥さん



子どもたちに広い視野を与えてくれる存在

エネルギーで情熱のある教師です。青年海外協力隊として危険があるかもしれない国へ行き、2年間子どもたちのために活動してきたことに敬服しています。国際理解や平和教育の授業を中心に取り組んでもらっていますが、木戸さんの話す言葉には一つ一つに重みがあり、子どもたちの視野を広げてくれている。今後は学校においても、さらに大事な役割を担ってほしいと思っています。